VOL. 11 No. 3

❋ 針葉樹會報 ❋

通卷第八十九號

遠見尾根、五龍行

小谷部

春風和やかな今時分、冬のスキー行を書くなんて可笑しな話ですが、夏の話が冬載つたりするこの頃の事ですから、これも恰度亦冬の會報に廻るのではないかと思ひまして敢てものした次第です。こんな現象も考へれば、時局以外に罪の一半は私共會員にあるのですから汗顔の極、文句を言へた所ではないのですがね。

扨今度の正月こそは、何とか學生なみに相當な登攀をし度いものと張切つたのですが、矢張り仕事もつ身の悲しさですか、年末のゴタツキで駄目になつて了ひました。一番始めは、學生の瀧谷行へ參加しやう等と妙に張切つたのですが、勿論期日が早すぎて駄目。次に今度卒業の船本ベン君から手紙で誘はれて、では肩の小舍を根據に小槍等やらうではないかと言ふ具合に話は進んだのでしたが、前申しました年末の出張騷ぎで豫定通り準備が出來ず、結局標題通り大軟化して了つたのでした。

閑話休題、山の連中に送られて、ベン君と二人昔懷しい新宿を發つた時の氣持は何とも云へません。かつての日若々しい出發の興奮を、幾度この午后十時四十五分發と言ふ列車に投じた事だらうかと思ひますと、それ丈でも新宿が第二の故郷の樣な氣がして來ます。すつかり學生氣分に立還つて——尤も小生は切符まで學割ですから——紀元二千六百年の元旦を雪白い神城に迎え、遠見小舍經營者、下川又寛の家で一休した後出發したのはもうお晝近い頃でした。この正月は何處も雪不足で、洩れ聞く所によりますと霧ヶ峯などは二万圓の見込はずれだ相ですが、流石此處北アルプスは別で、二米餘もの粉雪に埋れて遠見の小舍は山黨を招いて居りました。今冬は關學と大阪商大がこの方面に這入つた由ですが、關學は大遠見附近で

唯キャンピングした丈ですし、大阪商大も天狗の鼻から鹿島北槍を登つたと言ふ程度ですが、最近低調の極、實業團體に對してさへ顔むけならぬ關西學聯のメンバー中では、これでも秀逸な方だ相ですから凄いですね。

扨、遠見小舍へ着いたのは午后一時半で、スキーも何だか面倒になつてその儘上り込んで炬燵に落付いて了ひました。相不變關西雀が喧しく騒いで居りますが、商都の中心で鍛えた小生には一向耳ざわりには感じませんでした。その晩は、無い々々と言ふ又寛をなだめすかして見事お銚子三本をものにして、これには又目のないベン君とさしつさゝれつ、陶然として何時となく寢ましたが、眠つたか眠らぬ内にそれ迄寢て居た他のパーティが起きてガタ〳〵やり出し、一體何處へ出掛ける積りなのかまだ明日にもならないのに出發騒ぎをしてオチ〳〵安眠も出來ず、とう〳〵終ひにはこつちもつられて翌る二日の出發は曉暗の五時半と言ふ勉強振りになつて了ひました。滿天の星を戴いてキシ〳〵ときしむ粉雪を踏み々々進めるスキーのこの味は、同じ早朝の出發でもかつての冬、北岳バットレス攻擊に又荒澤への挑戰の朝、物々しい重裝で前進キャンプを出るのと全くと言つても良い位違つた氣持ですね。卒業すると時間と肉體的な條件から、段々こんなヴァリエーションルートの登攀は出來なくなるのは淋しい事ですが、普通のルートでなら何處の山だらうが人一倍氣樂に登れる丈吾々OBは得です。勝手知つたこの登行は些かの不安もなく、やがて小遠見も過ぎ（六、四〇）て輕く汗ばむ頃、素晴しいモルゲンロートの美觀に惠まれました。これなる哉と、やつぱりどんな事があつても冬のアルプス位は毎年訪れ度いものだと、つく〴〵感激致した次第です。シュプールはあり、荷は輕く、ベン君は到る所スナップし乍ら、全くのどかなシーハイキングです。先年私共が荒澤登攀を行つた際CIIを設置した大遠見のサイトは、曲りくねつた大きな岳樺で直ぐそれと知れ當時を懐しく想ひ出しましたが、メンバーだつた森脇パン君は兵隊だし、カマキリ君は病魔の犯す所となつて山には來られず、些か淋しいが佐重君以下は流石現役丈あつて、今冬の瀧谷登攀等に活躍して居られる事は人事ならず嬉しく思ひました。扨同尾根を白岳下のコル迄來ますと、昨夜(?)出發した連中に追付いたので私共も一息いれました。陽光は燦々と輝いて春の樣ですし、白馬、五龍、鹿島槍等千載一遇の眺望に皆宇頂天です。先の連中は何思つたかこのコルをシーデポーにして、シュタイグアイゼンで新雪にもぐり乍ら尾根通し白岳へ〳〵と登つて行きますが、私共二人はこんなゲレンデを…と許り尙もスキーで登り、途中から廣い白岳の腹を眞一文字に横切つて、五龍白岳間の主稜コルへ簡單に出て了ひました(十時半)。先づ劔、立山に久濶を叙し、そこからアイゼンの爪も輕く樂に五龍頂上へ着きましたが頂度お晝でした。四圍の素晴しい景觀をさかなに飯を食べましたが、寒いのでそこ〳〵にして愈降りです。

途中一寸した岩場があつて私共が手ばなしで平氣に降りて行くのに、後から登つて來た何處か關西の現役らしい一隊はザイルをつけてオヅ〳〵岩につかまつて居るので、成程と關西の低調ぶりの一端を現實に見せられた樣な氣がしました。そして連中の曰く「練習になるがな……」の負おしみも、所謂國内遠征等に逃避す

2

る氣持の一端を如實に現はして居る樣で憐れをさへ催しました。からして愈々デポーに戻り、そこから前方に擴がる白一色の大斜面へ斜一文字に豪快なシュプールを印し始めたのです（一、〇〇）。矢張りスキー登山の面白さは歸路の滑降に盡きますれ。ぐんぐんとダウンヒルオンリーです。途中滑り疲れて隨分休みゝ〻參りましたが、それでも三時には小舍へ戻る事が出來ました。その夜は又寬に又せがんでオミキにありつけました。それから翌三日は最後の歡をつくすべく淺間温泉目指して降つたのでしたが、正月三ケ日共物凄い景氣で今からではトテモいけませんと、飯田屋のカメさんに言はれてこの日は驛前の本館で泊つて了ひました。

（一五、三、三一記）

グラン・シャルモ北壁の登攀

大塚　武

我々はヒマラヤ登山史上に於けるメルクルの名を忘れる事が出來ない。一九三二年、三四年と二回にわたつてナンガ・パルバットに挑み、優れたる統率者であると共に、自ら果敢なる先登者であつた彼が、登頂寸前にして天候の激變に遭ひ、遂に氷雪の稜上に斃れるに至つた三五年の生涯は「ナンガ・パルバットへの道」と云ふ彼の遺稿集の標題に最も良く表はされてゐる。一九〇〇年南獨乙の小邑に生れた彼は、大戰にも參加し、戰後の國歩艱難なる祖國に於て、鐵道省の技術檢査官としての職を持つ傍、低い山から高い山へ、容易なる山から困難なる山へ、彼の精進は絶える事がなかつた。生命をかけた一峯を獲ち得る毎に彼の眼前には更に高き峯が現れた。それは妥協のない、滿足する事を知らぬ、それ自身の中に價値を持つ所の道であつたと云ふ事が出來る。その最後の一環としての一九三四年のナンガ・パルバット攻擊——我々はそれが、學者的探險旅行でもなく、登つたのか、登らせて貰つたのか分らない樣なブルジョア的登山でもなくして、最も普通な生活者の撓まざる精進の最後の、然し悲しき結實であつたと云ふ點に、深い尊敬の念と一種の身近い感情を禁じ得ない。そして彼の道に於て、數多のビッグ・クライムの中の代表的なものとして、又それが現在の我々の行方の目標となる意味に於て、我々には直接緣も由もないモン・ブラン山群の一峯、グラン・シャルモの北壁登攀の概略を傳へる事は、無意味ではないと思ふ。

原著は昨年度卒業部員（森川、佐々木、榎本、鷲崎四氏）によつて贈られたWilly Merklの遺稿集Ein Weg zum Nanga Parbatの中の一節、Im Schneesturm in der Charmoz Nordwand（一六五頁——一八一頁）であつて、相當長いもので細かい部分については我々には不要な點も多く、又原著にある美しい寫眞やスケッチを離れては興味も少いと思はれるので、この登攀の中核をなす北壁に於ける連續六〇時間のビヴァークを中心として、自由な抄譯を試みる事とした。その爲に、登攀の記述であるよりはむしろビヴァークの記述である樣なものとなつたのであるが、尙歐洲アルプス一流のゲビートのスケールや、それと鬪ふ人々の心情を窺ふに足るものを殘すならば、幸である。

× × ×

グラン・シャルモの北壁とは略々千米前後の高距を持つ壁であ

つて、一九三一年の夏迄未登攀として殘されてゐたものであつた。然しこの時迄誰も手をつけなかつた譯ではない。一九二六年モンセルの高名な登山家、フアレーとテツエナースがガイドレス・アタックを試みてゐる。然し天候の急變とピツケルを一本落した爲に、途中で放棄しなければならなかつた。メルクルが彼の僚友ウエルツエンバツハと共にこの壁を狙つてミユンヘンを出發したのは、一九三一年六月廿八日の午後であつた。メルクルの誌す所では、この計畫を持ち出したのはウエルツエンバツハであつたと云ふ。廿九日、二人はこの登攀の根據地モンテンフアーホテルに着いて同日午後氷河から北壁の偵察を行つた。

○第一回の登攀

六月卅日午前二時、ラテルネの光に導かれて寢靜まつてゐるホテルを出發、星空に明るい氷河を辿つて、黎明の訪れる頃二人は北壁の下に着いた。この壁の下部に一直線に刻み込まれた氷のリンネを辿るルートを取つて、午後を過ぎる頃この壁の中部をなす急な、表面に雪のついた氷壁の下端を獲得した。然し太陽の熱に弛んだこの壁の雪面は登攀の續行を許さなかつた。明朝雪のしまる迄待つ外はなく、二人はビヴークを決心した。この夜のビヴークは天候の不安こそ無かつたが決して居心地の良いものではなかつた。メルクルは云ふ。「見渡した所我々の近くには之と云ふ良い場所はなかつた。結局細長い、外に傾いたバンドで滿足せねばならなかつた。ウエルツエンバツハは長身を横たへるに足る場所を作るのに熱中して、土木技師としての本領を發揮した結果、私の古くから使つてゐる忠實なハンマーの柄を折つてしまつた。夜中の中に墜落しては大變なので、ハーケンを打つて身體を確保した。一通りの準備を終つて熱いお茶をメタコツヘルで沸して飲んだ。それは我々の貧しい夕食には洵に高價な飲物であつた。

それに景色のよい事も又素晴しかつた。荒々しい豪快な線を描いた山々の姿に隨分長い間我々は目を見張つてゐた。然し遂に薄暮の膜が谷の底から匍ひ上つて、最後の陽光は一番高い岩峯の頂をも離れてしまつた。我々は素早くツエルトザツクの中にもぐり込んだ。然しこの三千米の高度を持ち、落石の危險から全く解放されてゐない場所では、とても靜な夜は望めなかつた。こゝから一ピツチも離れてゐない氷壁の上を雪崩が走つて我々を驚かせた事もあつた。眞夜中頃　凄じい轟音が夜の靜寂を破つた。忽ち我々はツエルトザツクから身體を乘り出して、眼前に起つた、普通ではとても見られない大芝居の壯觀に我を忘れて眺め入つた。テンディア氷河からコル・デ・シヤモアールに懸つてゐる急峻な壁から、巨大な岩塊が人を射すくめる樣な激烈な音響をあげ、長い火花の尾を引いて轉落して行くのである。この爲に壁の下部は粉々になつた石のほこりで霞んだ程であつた。」

この苦しいビヴークの次の朝、五時半には二人は早くも氷壁に向つて攻擊を開始した。

そして三時間の後には氷壁を終つて頂上直下三百米に達した。こゝからは細いリンネに入るか、頂上を中心としてその北西稜、北東稜から出てゐる幾つかの岩稜に取付くか、何れかを選ばねばならなかつた。二人はリンネは落石の危險が甚しくて問題とならないと見て、右側の岩稜に取付いて、困難な岩登りの後、午前十一

時北西稜上、頂上直下一六〇米の地點、バルベイ・インフエルトの地圖にある、標高三二六五米の岩峯の一寸上のシャルテに達した。然しこゝから頂上への北西稜の岩場は全く人間の登り得る限界を越えてゐた。メルクルは云ふ。

「我々は茫然として、一際美事に積まれてゐるケルンを眺めるのみであつた。そのケルンは我々に、登攀はこゝ迄だ、之以上試む可きではない、と嘲ける樣な身振りで告げてゐる樣に見えた。事實この身の毛のよだつ樣に滑な垂直な岩壁にアタックする事は狂愚の沙汰でしかない。頂上迄もう一六〇米しか殘さない此處で、引返す決心をする事は洵に殘念な事ではあつたが、然し理性の命づる所であつた。」

かくて第一回のアタックは壁の最上部を殘して退却を餘儀なくされた。然し天候の急變——屢々襲ふ烈しい夕立の中でその下降は決して容易ではなかつた。勿論ノルマル・ルートを、何回とも知れぬアップザイレンの後、氷河に下り切らない中に夜の闇に捕へられて、再び非常に苦しいビヴークを強いられ、翌七月二日モンテンファーホテルに引返したのである。

○第二回の登攀

「次の日二人の眼は絶えずシャルモの北壁に注がれてゐた。我々の登路が頂上直下一六〇米の北西稜に終つてゐて、頂上自身に達してゐないと云ふ事が我々に休みを與へなかつた。そこで北壁完登を果す爲に、最後の壁を目指して第二回のアタックを行ふ決心をした。

一九三一年七月五日、——雲一つない眞夏の陽光を浴びて我々は人の好いホテルの人達に送くられて出發した。」

この登攀の第一日目は先づ前回行き盡した北西稜上の岩峯（三二六五米峰）の基部にある所の北西稜の肩（三一一七米）、と呼ばれる地點にノルマルルートから登つて、そこで一晩ビヴークする事であつた。このビヴークは豫定したものでもあつたが、メルクルの經驗ではコーカサスのウシウバの南稜に於ける第一回のビヴークに次いで最も美しき場所であつたと云ふ。

翌六日早朝、二人は前回氷壁から岩に取付いた地點を目指して北西稜から北壁の横斷を試みた。午前九時にはこの地點に到達した。こゝからのルートについては、先づ第一にはこの前は避けた、リンネ——頂上の稍東側に拔ける猛烈に急なリンネを登るか、それが駄目な場合にはリンネの東側の岩場を登つて北東稜に出る積りであつた。然しこのリンネの下部に於てメルクルもウェルツエンバツハも身邊をうなつて飛ぶ落石に脅やかされた。丁度この時頭上の尾根を頂へ向ふ一隊を見て、二人は落石に氣をつけてくれる樣、話を交した。

然しそれからも致命的な危險性を持つ頻々たる落石を二人は幸運にも避け得たが、之以上リンネに固執する事は出來なかつた。そして東側の薄氷の張つた岩稜にとりついた。

「この登攀も容易ではなかつた。然しそれにも增して惡い事には、途中で新しい敵が我々に迫つて來た。早朝天候は當分このまゝの狀態を保つかに見えたにもかゝはらず、我々が氣の付かない中に、突然激變して來た。鉛色の雲塊がグラン・シャルモの頂稜にからみついて安全な避難所、或ひは少くとも容易な岩場に達する

以前に夕立が襲つて來た。困難な場所でツエルトを被つて天候の回復を待たねばならなかつた。三時間我々は叩かれ通した。やつと僅な天候の間隙を見付けたが、身邊に迫る闇黑の手を逃れて頂を獲ち得る爲には、猛然、急がねばならなかつた。我々は能ふ限りの力で進んだ。困難な岩壁や、氷のついたバンドやクラックを强引に登つた。然し頂に達する事は出來なかつた。異常に脆い壁や、ホールドのない岩が我々の登高を阻んで、時間は遠慮なく過ぎた。そして遂に、再び荒れ狂ふ暴風雪が始つた。グラン・シャルモはその攻擊者に向つて頑强に抵抗した。かくて我々は頂上直下一〇〇米の所で遂に山の捕虜となつてしまつた。最早我々はこの恐ろしい場所で二晩目のビヴークをする外はなかつた。この時は勿論二人共、この狹苦しい場所にこれから二日三晩も釘付けにされ樣とは想像もしなかつた。漸てビヴークの準備も終つた。實際この時は、このせまい場所から雪と氷をどかして、リュックサックを敷いてツエルトを被り辛抱强く天候の回復を待つ事以外には如何なる方法もなかつた。それに殘念な事に、昨夜のビヴークでメタは使ひ盡してしまつたので、温いものは何一つ作る事が出來なかつた。

雨になつたり、雪になつたりして嵐は一晩中續いた。とても激しい寒氣に襲はれた。次の朝も一向回復の兆は見えなかつた。風雪に次ぐ風雪、少しも勢を弱める事なく、終日氣狂の樣に荒れた。我々は最早この悲慘な狀態から脫出する事は全く不可能であつた。

こうして三度目の夜が、そしてこの場所に於ける二晩目の夜がやつて來た。我々はそれ程烈しい睡けは感じなかつた。然し時々まどろんだが、その中姿勢の窮屈さに堪へられなくなつて來た。その夜もうまず撓まず雪が降り風が吹いた。濕氣が薄いツエルトの布地を通してそれに觸れてゐる皮膚に浸み込んで來た。漸て朝が來た。夜來の雪に我々は深々と埋れて、ツエルトから匍ひ出して、まはりの雪をどかし、そう迄しても尙この場所に嚙りついてゐなければならなかつた。

この朝も視界は僅か二、三米に限られて、午前中は恐ろしい力で嵐が狂ひ廻つた。まだ〳〵天候回復の兆は全く見られなかつた。それに加へて、凡ゆる制限をしたにもかゝはらず元々少なかつた食糧が愈々乏しくなつて行つた。恐ろしい問が夢となり幻となつて我々を脅やかした。この頭上の壁が我々に登れるだらうか？若し之が登れなかつたら、我々は一體どうなるのだ！最後のそして最惡の場合、我々は深雪のついた、雪崩の危險が恐ろしい迄に高まつた足下の壁を命を賭して下られねばならないのだ！

ゆつくりと時間が經つて行つた。この絕望的な事態に追ひ込まれては、もう話を交す事もなかつた。唯、最後迄しがみついて闘ふ事、この力强い一念が我々を勵ましてくれた。パンとソーセッジの最後の一片を我々は默々として飲み込んだ。最早後には極く少量のチーズとソーセッヂと菓子が我々の所謂〃固定資金〃として殘るのみだ。

夕方七時頃、日の光が單調な灰色の霧の膜を通してさし込んで來た。その時の我々の喜びと救はれた感じとを測り得る者があらうか！ 思はずツエルトから頭を出して、貪る樣に眺めた。遂々

三日目にして青空の一片を望み得たのだ。雲塊の中の青い空がだん〳〵大きくなつて行く。その中にエイギーユ・ヴェルトの眞白い三角錐の頂が夕日を浴びて輝き出した。短時間ではあつたがモンテンファーの雪に埋れた谷も見えた。「明日こそ良い天氣だ」明るい氣分で我々はツェルトの中に潜ひ込んだ。

然しこの喜びも忽ち掻き消されてしまつた。

一時間も經たない間に雨が又ツェルトの地にしたゝり出した。この全く思ひがけない天候のぶり返しに我々はどんなに沈んだ、居たゝまれない絶望に襲はれた事であらう。悲痛な氣持で夜を迎へた。この場所に於ける三晩目の夜を、そして恐ろしいシャルモの北壁に於ける四度目の夜を。

狹い溜り場に於ける何時果つ可しとも見えぬビヴークは、もう不快を越えて堪へ難き苦痛となつた。想像され得る最惡の天候の下で、我々はこの場所に嚙りついてゐる外はない。固くなつた身體をのばす事もどうする事も出來ない。立つたり坐つたり、それを繰り返して堪へ難い苦痛を防ぐのである。こうして我々は六〇時間うづくまり、そして待つた。音をたてゝゐた雨は途中で又雪に變つた。そして胴震ひの來る恐ろしい寒さに責め苛まれた。

然しこの突然の氣温の降下が次の日の天候の好轉の希みを抱かせた。それだけが、この終りを知らない長い夜の光であつた。

さう〳〵朝がやつて來た。それは素適に寒い朝だつた。然し風が空を洗ひ清めてくれた。

エイギーユ・ヴェルトの頂だけは未だ雲の塊をつけてゐた。そしてこの好轉も長持ちしないで、數時間の中に又崩れ出す事を何よりも確に示してゐた。許された短時間の中に頂を獲得しないならば、我々の運命は最早確實的だ。天候との競爭に負けない爲には、死物狂ひに急がねばならない。準備をして立上る迄にもどかしい樣な長い時間がかゝつた。

さあ、行かう！ それは我々の合言葉であつた。(午前六時)」

グラン・シャルモの頂から出るその北東稜にはエイギーユ・ド・ラ・レブブリークと呼ばれるモンブラン山群特有の針の樣に鋭い尖峯がある。二人がビヴークサイトから頭上の壁を登つて辿りついたのは北東稜上、丁度頂上とこの針狀峯との中間であつた。僅なピッチではあるが三時間を費してこゝまで來た時、再び天候は惡化して雪が降り出した。而も北東稜は小さいツルムがギザ〳〵に亂立した技術的にも極めて困難な所であつた。メルクルは云ふ。

「こゝまで來て、行先を見上げた時、我々は又不安になつた。然し登るより外、どうしやうと云ふのだ！」

硬直した四肢を以て、膝迄もぐる新雪の岩場との激鬪は更に六時間も續いて午後三時遂に二人は頂を極めた。ビヴークサイトから頂迄の最後の一〇〇米に最惡の狀態とは云へ、九時間を要したのだ。

「こうしてグラン・シャルモの北壁は我々のものになつた。それは我々を激烈な鬪爭に引きづり込んで、勇氣と忍耐とに於て我々が提供し得る一切のものを要求した。」とメルクルはその登頂の感激を短い言葉の中に誌してゐる。頂からは勿論ノルマルルートを下つたが、ホテル・モンテンファーの戸を叩いたのは夜中の十一時半であつたと云ふ。我々はその登攀の困難さを偲ぶと共に、「ナ

ンガ・バルバットへの道」が如何なるものであつたか、そして一時的感激でなくそれを實踐躬行して惓む所がなかつたメルクルの一生について改めて考へなければならない。

（一九四〇、三、二六）

記　錄

○伊吹山　小谷部　外五名

一、一四　晴一時吹雪　近江長岡驛發（前三、三〇）—三合目小舍（約八時）—六合半迄登り吹雪の爲引返す、ゲレンデにてスキー練習—近江長岡歸着（後五、〇〇）

○箱館山　小谷部　外大勢

一、二七　大阪天滿橋發（七、〇〇）—濱大津經由—近江今津（約一一、〇〇）同福田屋旅館泊

一、二八　今津—日置前—箱館山—今津—大阪

この山は奥牧野の稍西寄りにあつて登りが仲々急な爲、一般スキーヤーの來襲が少く、關西では珍らしく靜かな所である。積雪量も雪質も大體よく面白く滑れた。頂上近くに粗末な小舍がありシーズン中は簡單な飯位賣つて居る。

消　息

園山德三郎君　二月二十八日召集を令せられ、朝鮮軍司令部に於て軍務に服せらる。（留守宅）京城府漢江通六番地二三。

太田　又一君　澁谷區北谷町五二番地に居を定めらる。

新入會員

船本　文治君　（就職先）住友金屬工業株式會社本社
（住所）大阪市住吉區万代西一ノ三〇齋藤史方

原　鐵三郎君　（就職先）住友機械製作株式會社（新居濱）

針葉樹會新年大會　一月七日（日）於新橋太田屋

出席者（會員）中川、五十嵐、渡邊、吉澤、村尾、近藤、增山、小柳、林、小林、望月、佐々木、榎本（部員）岩崎、原、船本、大塚、日江井、宮城、山田。

時節柄忘年會は中止として、紀元二千六百年の正月には、入營さるゝ小林、佐々木、榎本三君の壯行會も兼れ、盛大に會を開かうと云ふ譯で、特に名世話人小柳氏の盡力を得て今夜の會が催された。

關西の五十嵐氏の顔も一枚加はり、北海道歸へりのクマ、ペンコン三氏を迎へ、そこえ既に大分アルコールの入つたマゴさんの來場。現役のうつしてきた瀧谷の物凄く優秀な寫眞に見惚れたり、飲む程に食ふ程にすつかりいゝ氣持となつて、全く近來にない大盛會であつた。尙戰地に在る松木、鷹野、新羅の三氏に心からなる寄せ書きをした。

針葉樹會例會　二月十二日（月）如水會館

出席者（會員）吉澤　村尾　矢作　久保田　手塚　太田　高見　增山　清水　林　松浦　望月（部員）船本　日江井

東京勤務となられた太田又一氏を迎へる。

針葉樹會例會　三月二十日（水）如水會館

出席者（會員）中川　吉澤　近藤　磯野　久保田　太田　增山　林　望月（部員）原　岩崎　宮城

出張上京中の近藤恒雄氏を迎へる。遠來の友を圍む會としてはいさゝか顔振れが揃はなかつた。